

TEN

英語教師のための情報誌

Vol. 54
FALL 2024

TEACHING ENGLISH NOW

特集

これからの英語教育 —「個別最適な学び」と「協働的な学び」

- 01 個別最適な学びと協働的な学びの実現
～個に応じた指導と英語教師の役割に焦点を当てて～ 津久井 貴之
- 03 アナログでも実現可能な一斉授業における「個別最適な学び」 奥住 桂
- 04 個別最適な学びを意識したプロジェクト学習 宮崎 直哉

連載

- 05 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 白倉 美里
- 06 Essay Storytelling Matthew Miller
- 06 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 「固有名」にtheがつくのはどういう時か 巨理 陽一

SANSEIDO

これからの英語教育

—「個別最適な学び」と「協働的な学び」

GIGAスクール構想によって1人1台端末が整備され、ICTを活用した新たな教材や学習活動等を授業に取り入れながら、生徒一人一人の学力や学びの特性に合わせた指導・学習を行うことが求められています。

本特集では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について津久井貴之先生に解説していただき、それぞれの実践例を奥住桂先生と宮崎直哉先生に紹介していただきます。

01 個別最適な学びと協働的な学びの実現～個に応じた指導と英語教師の役割に焦点を当てて～ 津久井 貴之

03 アナログでも実現可能な一斉授業における「個別最適な学び」 奥住 桂

04 個別最適な学びを意識したプロジェクト学習 宮崎 直哉

個別最適な学びと協働的な学びの実現 ～個に応じた指導と英語教師の役割に焦点を当てて～

津久井 貴之
(群馬大学)



英語の授業を「個別最適な学び」の視点から考える

■「個に応じた指導」について

「個別最適な学び」には、「指導の個別化」と「学習の個性化」の側面があり、これを教師の視点から整理した概念が「個に応じた指導」とされている（資料1）。

「指導の個別化」は、学習者の特性や学習進度、実態に応じて、教師が学習環境をデザインすることだと考えられる。例えば、学習時間や方法、教材を柔軟に設定したり複線化したりすることなどである。つまり、英語教師は単元全体のdesignerとして、全ての生徒が一定の目標に到達することを目的に、3年間・1年間の到達目標を俯瞰し、既習事項や題材の系統性を考慮して単元のゴールとなる言語活動を構想する力が今まで以上に求められる。その際、単元としての一貫性に注意しながら、到達目標を言語活動における生徒の具体的な姿で表せるか（例えば、ライティングであれば生徒に到達してほしい状況として、生徒の実際のライティングの成果物を教師が英語で記述できるか）を意識したい。なぜなら、ゴールまでの見通しがあるからこそ、指導方法や教材、学習時間等に柔軟性をもたせることができるからである。例えば、中学2年生の「ニュージーランドから来るALTのテイラー先生のために、前橋市の魅力をわかりやすく伝える動画を作ろう」という話すこと【発表】の言語活動における「わかりやすく」とは、①生徒の学習実態、②既習及び新出言語材料、③言語活動の目的・場面・状況、の3点から具体的にどのようなことを想定すべきだろうか。③については、授業で生徒たちに考えさせる場面を見かけるが、「大きな声で」「原稿を見ないで」「相手（この場合はカメラ）を見て」という工夫が挙げられることが多い。これらは、おおよそその発表場面でも通じるわかりやすさであり、この単元で求めたい「わかりやすい発表」であるのか。この問いへの教

師なりの答えなしには、「個別」に学ばせることはできても「最適化」は起きないだろうし、学習過程での中間指導や介入で形成的評価を指導や活動の柔軟な調整につなげるのも難しいだろう。個別最適な学びがクローズアップされている今こそ、単元全体の見通しを立てたり、単元としてのまとまりを意識したりして、学習の個性化（後述）が可能な学習過程の設定、生徒たちが目指す言語活動のゴールの具体化、そしてそのための学習実態の把握がより重要になってくる。

また、教師の間で「スローラーナーへの支援」は多く語られるが、「ファストラーナーへの支援」の意識が抜け落ちていないだろうか。先に活動を終えた生徒が何をしてもよいかかわらず、授業に関係のないおしゃべりをしているペアワークをよく見かける。そして、先生が重点的に支援をしている生徒がある程度の学習を終えるまで、時間の経過とともに「放置されるファストラーナー」が教室に増えていく。先生方が重点的に個別指導を行う支援体制とその時間を確保するためにも、ファストラーナーへの支援についても見直してみるとよい。

次に、「学習の個性化」の側面からも考えてみたい。学習の個性化とは、教師が生徒一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することによって、生徒自身で考えて学習が最適となるよう調整することである（資料1）。香川県のある公立中学校の授業では、言語活動の目的・場面・状況の設定にこの機会が提供されていた。ALTとその友だち2人について、それぞれの好きな食べ物や関心ごとが状況として設定しており、伝えたい相手（+状況）を選んで学習するという「学習の複線化」が図られていた。選んだ相手の状況を踏まえてどのような内容をどの順番でどんなふうに伝えたらよいか、タブレットを使ったり、同じ相手を選んだ異なるグループの生徒同士が話し合ったり、先生に質問をして構成に関わる具体的なフィードバックを受けて英文を直したり、単語を調べたりするなど、さまざまな生徒の姿（学習の個性化）が見られた。教師の言語

活動の設定の工夫によって、学習課題に応じて最適な学習となるように無理のない範囲で調整が行われていた印象的な授業であった。

■1人1台端末と「個別最適な学び」について

「個に応じた指導の充実を図ること」は、筆者が英語教師になった当時の学習指導要領（1998年改訂）でも求められており、学習者の実態や個人差にどのように応じるかというのは古くて新しい問題だと言える。当時との決定的な違いは、現在は1人1台端末が整備されていることである。子どもの学びのプロセスを教師が効率よく把握したり、生徒同士で共有したりできるのは、端末の導入によるところが大きい。生徒たちのふり返りの様子やその蓄積、アンケートの結果なども一元化して教師の手元で見られる状態になった。ぜひ、把握した生徒の学習実態や興味・関心を単元づくりや言語活動の設定、授業中の学習進度の調整などに生かしてほしい。また、学習規律やインターネット環境、端末のメンテナンスなどさまざまな現実的問題や理由があるのは承知のうえで、先生方には次のことを申し上げたい。端末を生徒たちが自由に触ることができる場面を作してほしい。「まだ触らないで」「机の中にしまって」「翻訳ソフトは使わないで」などの“Don't”の注意ではなく、効率的な使用方法を示しつつ、生徒が試行錯誤し、個別最適な学びにチャレンジする機会を設けられるとよい。英語という外国語を学ぶ場合、翻訳・添削ツールについても「使わせない」から「どう使うとよいか」という使い方を指導する時期にきているのではないだろうか。

また、言うまでもなく「協働的な学び」においても、ドキュメントやファイルの共有、コメント機能などを用いて教室を超えた、または授業時間を超えた学習が可能になった。詳細は割愛するが、1人1台端末が英語の授業のあり方に大きな一石を投じたのは間違いない。1人1台端末を手段として、どこでどのように使うのか、使わないのか。教師の見極める力が問われている。

英語の授業を「協働的な学び」の視点から考える

「協働的な学び」には、生徒同士の話し合いや意見・情報の交換、整理、分担、協働作業、教室外の多様な他者との交流なども含まれるが、まずは教室内の生徒同士が互いに認め合い学び合う環境づくりが大前提となる。ペア・グループワークをすればすぐに生徒同士で学び合う姿が見られるわけではない。先述の「ニュージーランドから来るALTのテイラー先生のために、前橋市の魅力をわかりやすく伝える動画を作ろう」という言語活動で、グループで動画を制作するとすれば、以下のような指導・支援や学習のデザインが必要だろう。

- ア テイラー先生の興味・関心を理解し、言語活動における個人の学習課題や目標を明確にする
- イ 前橋市の魅力と聞いて思い浮かぶことを考える・インターネットで調べるなど、個別に考えたり調べたりする
- ウ 個人の意見や考え、情報を伝え合い、グループでどのような動画を制作するかを話し合う

- エ 動画をわかりやすくするための工夫をグループで話し合う
- オ 役割を決めて作業や学習を行う
- カ お互いの学習や作業を助けたり確かめ合ったりする
- キ 担当した部分の動画について相互にフィードバックをもらう
- ク 成果物（映像）だけでなく、グループとしての取り組み（学習プロセス）を振り返る

ここで注意したいのは、テーマやタスクを与えるだけでは不十分で、この言語活動で言えば、「ニュージーランドから来るALTのテイラー先生のために、前橋市の魅力をわかりやすく伝えている」姿をルーブリックやモデルの動画で具体化しておくことが重要である。教師と生徒で目的や目標を共有したうえで、ルーブリックやモデルの動画などを視聴しながら、「わかりやすく伝える工夫」について生徒同士が話し合ったり、必要に応じて教師が個別に介入したり、全体にフィードバックを与えたりするなどしたい。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実については、上記の例であれば、「キ」の後にフィードバックを踏まえて、生徒一人一人が練習したり発音をタブレットで確認したり表現を調べたりする学習を行えば、協働的な学びによって、個別最適な学びが充実することになる。モデルの動画を複数用意すれば、個人の課題に応じて映像を見直して練習することもできるだろう。「個別最適か協働か」の二者択一ではなく、両者を往還しながら生徒の学びが広がり深まっていくイメージをもち、生徒の授業中の姿は教師の指導へのフィードバックであるという認識のもと、タブレット端末も活用しながら生徒の学びのプロセスをよく見てほしい。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のために求められる教師の指導・支援や役割について

最後に2つの学びの一体的な充実に必要な英語教師の力や姿をまとめたい。先生方がそれぞれの実践を積み重ねる中で、2つの学びの充実とそこで求められる英語教師の役割を明確にしていってほしい。

- ① 目の前の生徒たちの実態や興味・関心を的確に捉える力
assessorとして、生徒のふり返りや発表動画、アンケートやテスト結果、授業中の姿などを見て次の単元づくりに反映させよう！
- ② 言語活動を中核に据えた単元の指導・評価計画を作る力
designerとして、生徒の実態を基に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が保障される学習過程や環境を設定しよう！
- ③ 個別と協働、教科書題材と生徒の興味・関心、モデルの英語と生徒の英語などのギャップ（間）に入って支援をしたり外したり、わかりやすい英語で表現したりフィードバックを与えたりする力
mediator & facilitatorとして、目の前の生徒に合った英語や話題で語りかけたり問いかけたり、フィードバックを与えたりしよう！（端末やデジタル教科書ではできない、生身の英語教師の役割です。）
- ④ 新しい指導法やツールの活用に挑戦するマインドセット
innovative, adaptive, and proactive role-modelとして、先生自身が新しいものに柔軟に前向きにチャレンジしよう！（生徒たちは、先生の姿から様々なことを学ばずです。）

アナログでも実現可能な 一斉授業における「個別最適な学び」

奥住 桂
(埼玉大学)



アナログでも実現可能な「個別最適」なドリル型学習

■学習方法を生徒が選択できること

英語科における「個別最適な学び」という文脈では、ICTを効果的に活用した実践事例がすでに数多く共有されている。特に、さまざまなアプリや教育支援システムを活用して、個々のペースでドリル教材などに取り組むような事例が多い。こういった「個別化」と「反復」はICTの得意なところで、タブレット端末などが普及した現代らしい学習活動にも思えるが、実はICTを持ち出すまでもなく、アナログな教室環境でも十分に実現可能である。

例えば、私が中学校教員時代に取り組んでいた「どっちをやっても答えが同じになるワークシート」という学習活動は、そのヒントになるかもしれない。これは、いわゆる新出文法事項の形式的な練習問題を個別化するアイデアで、ワークシートの右と左にレベルの異なる2種類の問題を印刷するというものである。生徒はワークシートを折った上でどちらか1つの問題を選択し、解答する。ただし、タイトル通り、「どっちをやっても答えが同じになる」というのが肝で、例えば左側の和文英訳問題（上級）を解いた生徒も、右側の並べ替え問題（初級）を解いた生徒も、その後の答え合わせの際に一緒に手が挙げられるという仕掛けになっている。生徒は、自分がどちらの問題を解いたかを申告する必要もないし、上級をやっていたけど難しいので途中でちょっとだけ初級をチラ見するというやり方（中級）も存在する。

問題作成も、まず上級のものを作成して、それをコピーした上で問題のタイプだけ変更すればいいので、2種類作成するといっても2倍の労力がかかるわけではない。しかしこの一手間で、単純なドリル問題であっても、**生徒が自分で内容や学習方法を選択しながら主体的に取り組めるようにすることは可能なのである。**

■自分の頭で何度でも考えること

ドリル型学習の質を高めるもう1つの工夫は、**答え合わせの際に「正答が示されない」ようにする**ということである。ドリル教材の丸付けや一斉授業での答え合わせの場面では、自分の解答に対する正否だけでなく「正答」も同時に示されてしまう。本来、不正解だった問題について何が違うのかをもう一度自分の頭で考えることこそ質の高い学びになるはずだが、そのタイミングは生徒によって異なるというのも難しいところである。

このような課題の「個別化」も、まさにICTの得意技ではあるのだが、私はこれも人力で対応してきた。教師が授業中、個別に採点をする際に正答にだけ丸をつけて、不正解のところには何も書か

ないようにしたのだ。すると、生徒は（場合によっては）何度も往復しながら、自力で正答に辿り着こうと必死に取り組むようになった。

ただし、このやり方だとすぐに教師の前に長い列ができてしまいがちで非効率でもある。そこで、全問正解した生徒を「名誉採点者」として任命し、私の隣で一緒に採点をしてもらうことにした。もちろん、「名誉採点者」は私と同じように正答に丸をつけるだけ、である。このような工夫で、私は学習の「個別化」を図ってきた。

「反復的」で「創造的」な言語活動

ここまで、特に〔知識・技能〕の定着を目指す段階での、「個別最適化」を考えてきたが、本来「個別最適な学び」や「ICTの活用」の目指すところはこのような反復的なドリル型学習だけでなく、より主体的で創造的な（思考・判断・表現）を育む言語活動にあるのだろう。とはいえ、教室の環境や先生方の経験、そして中学生の習熟段階を考えると、一足飛びにそこに向かうのではなく、**その手前**でできる「反復的」で「創造的」な活動にこそ、意義があるのではないかと考える。

大学での授業実践になるが、現在**生成AIを活用した英作文の学習活動**に取り組んでいる。学生は、自分の書いた英作文をそれぞれChatGPT等の生成AIに採点してもらうのだが、その際「誤っている箇所だけを指摘して、正答や改善例は示さないように」と生成AIに指示する。こうすることで、すべて生成AIに修正してもらうのではなく、前述のドリル型学習と同様に自分の頭で英作文の修正に取り組むことが可能になる。「正しい英文を完成させること」ではなく「正しい英文が書けるようになること」が英語学習の目的だと思うので、それに合った生成AIの使い方があるということだ。

この生成AIとの「壁打ち」は学生にも大変好評で、「今度はどうだ？」と祈るような表情で採点結果を待つ学生の姿が印象的だ。これは、「壁打ち」のゲーム性を、英作文というクリエイティブな活動に組み合わせたことの効果といえるだろう。

生成AIの授業での活用については、利用規約の関係（使用者の年齢の問題等）で小中高の教室ですぐに同様のことができるかはわからないが、ここまで述べてきたように多くの活動はアナログな環境でも実現可能である。また、ICTを使うにしても、「正答は示さない」等あえて制限をかけることで学びが深まるという側面もある。40人もいる教室で個別最適化は難しいとも思うのだが、まずは背伸びせずに、手持ちの道具と環境で「個別化」を図る工夫を試してもらいたい。

個別最適な学びを意識した プロジェクト学習



宮崎 直哉
(掛川市立西中学校)

プロジェクト活動の授業展開と指導の留意点

プロジェクト活動でまず大事になるのは、プロジェクトの最後(単元末)にどのような形を目指すのか、という目標設定になる。私の場合は、教科書の単元で扱われている題材や、登場人物の会話の内容などを読み込んでからプロジェクトを設定する。進めたいプロジェクトの枠に教科書の題材を当てはめると、無理が生じてしまうことが多いからだ。次に、生徒には「英語の授業のメインは自分たちのプロジェクトを進めること」であり、教科書本文の理解や新しい語彙、言語材料の学習は自分たちのプロジェクトにおいて表現を助けたり、理解を深めたりするための参照資料だという意識を持たせる。そこで、教師が考えたプロジェクト案を提案し、それについて生徒同士で意見を出し合い、修正していく。8時間を予定している単元であれば、その割り振りが生徒の意見を取り入れながら修正する。また評価についても、どのレベルであればAと言えるのか、どれくらいの完成度を目指すのかなど、生徒と練り直しイメージを共有する。プロジェクト活動は、教師が仕組むだけでなく、生徒自身が見通しをもって完成まで進められることが重要だ。

現在取り組んでいるプロジェクトは、「『15歳の私の心』を伝え合おう」というものだ。これを考えるにあたり、次のように教科書の題材を分析し、ねらいを設定した。この単元のテーマは「英語で書かれた文学」で、日本生まれの俳句を、英語を通して異なった角度から捉えることができるようになっていく。伝統的な英詩の特徴なども取り上げられ、生徒が初めて学ぶ内容や難しい語彙も多いが、理解だけに留めてしまったりは非常にもったいない。そこで、単元末に向けて、日々感じていることや考えていることを英詩や英語の俳句で表現し、コメントを英語で伝え合ったり、質問し合ったりできるようにしたいと考えた。一見すると、自分の考えを英語で表現することが主な活動のように見えるが、授業者としては、生徒が作品を読み合い、書き手の考えや思いをくみ取り、価値付けることにこそ意味があると考えた。

また、この単元では、より良い作品を作るために、教科書本文を読み、ヒントを得て、作品を修正するというサイクルを繰り返し、複数回作品に向き合うようになっていく。例えば、教科書本文では、日本の俳句が持つイメージに興味を抱く人の様子が書かれている。ここで、自分が作った英詩は、読み手にイメージが伝わるものかどうかを検討し、作り替える。以前のものとどのように変わったか、実際に友人に読んでもらってコメントをもらう。次に、日本の伝統的な俳句と英詩の特徴を比較し、違いや共通点を挙げさせる。ここでは、音韻やリズムなどの工夫を学び、それらを生かして自らの作品にアレ

ンジを加えることができる。当然、英文も難しくなり、未習の語句がたくさん出てくるが、自らの作品レベルを向上させるために、意欲的に調べながら英文の内容を理解しようとする姿が見られた。伝統的な俳句や英詩の良いと思う部分を取り入れたり、多様な視点から作品を見直したり、考察を深めたりしながら、他者意識をもって改良を加えていくことで、最初は思いつきの作品だったものが、少しずつ読み手にイメージが伝わるようになっていった。

実は本実践は今まさにこの段階だ。この後、お互いに作品を読み合い、フィードバックを英語で伝え合う活動を予定している。

プロジェクト活動に「個別最適な学び」を どう取り入れるか

プロジェクト活動では「個別最適な学び」をどのように取り入れるかという発想ではなく、もとより個別のプロジェクトを進めるのだから、個の考えを深めることができるよう、生徒が自由に協働しながら学ぶことができる環境を整えるという発想の方がうまくいくだろう。筆者は常に4人ほどの小集団で学習を進めているが、学習は個別となることも多い。しかし、個別の学習では理解が難しい英文があったり、他者の考えを聞き取れなかったりすることも多い。そこで他者といつでもつながることができるようにしておく必要がある。そうすれば、生徒は常に誰かと情報交換をしたり、一緒に考えたりすることができる。実際に、個人プロジェクトであっても、自由に声を掛け合い、友だちのプロジェクトについて意見を伝え合ったり、グループ全員で議論したりする場面もよく見られる。注意して会話を聞いてみると、ある生徒が気になったことや検討したいことをきっかけに、自然と協働的な学びが始まり、より深い学びへとつながり、個人へ還っているようだ。

プロジェクト活動では生徒がじっくり考えるため、進度に差が出ることも多く、調整のためにも、十分な時間を確保する必要がある。そうすることで、生徒は自分が本当に伝えたい内容を英語で伝えるための語彙や表現を吟味することができる。もし3年生で学ぶようなやや難しい表現や語彙を選択したとしても、時間があれば、個人の取り組みを見直す際に、相手が理解できる表現になっているかどうかを確認することができる。また、情報共有の場面でも、一人一人の価値観や、それに基づいた英語表現に触れることで、個別の学習がつながり、共感や理解を伴う深いコミュニケーションを引き出すことができるため、時間を確保することは大切だ。自分の考えが友だちに伝わった瞬間や、友だちの考えを理解できた瞬間の喜びや振り返り等を英語で伝え合ったり、ノートに記録したりすると、プロジェクトの学習は個人レベルでさらに深まるだろう。

Q

Question

会話の継続が目的のやり取りの活動では、語彙や表現、文法の誤りに対する指導はどのようにすればよいでしょうか。



臼倉 美里 (東京学芸大学)

Answer

すらすらと話せるようになるまでは、インプットと練習量を増やすことを優先しましょう。話せるようになってきたら、正しく話すことを意識させる指導を入れていきましょう。

A

流暢さが先、正確性は後

英語を話したり書いたりするアウトプットの能力は、まず、流暢に話せるようになった後に、正確性の精度が上がると言われています。

例えば、一文を口に出すのがやっとなどという生徒が、たどたどしく「He teached me the way to station.」(「彼は私に駅までの道を教えてくれた」という意味)と言ったとします。この生徒に「動詞はteachではなくtellを使う方が良いね」とか「teachの過去形はtaughtだね」「冠詞が抜けているから気を付けよう」と指導したとしても、おそらくその助言を受け止めるだけの余裕はありません。このような生徒には、誤りに対する指導をその場では行わず、やり取りを続けることだけに集中させてあげるのがよいでしょう。

話す練習を続けていくと、少しずつたどたどしさがなくなっていきます。そうすると、言語の形式(正確性)に注意を向ける余裕がでてくるので、そのタイミングで誤りに対する指導をしてあげましょう。このとき、多くの生徒が間違えてしまうポイントを取り上げてクラス全体の前で解説をしたり、「もう一度ペアで話してもらえけれど、今度は時制に注意してみよう」というように言語形式のどこに注意を向けるか、ポイントを絞ってやり取りの活動に取り組みせたりするとよいでしょう。

たくさん間違えさせてあげよう

私たちは最初から正しい文法や語彙を使って話せるわけではありません。誤りを繰り返しながら、徐々に正しく話せるようになっていきます。つまり、正しく話す力を身に付けさせるためには、生徒にたくさん間違わせなければなりません。教師が「正しい英語を話させてあげたい」と思うあまり、やり取りの活動の最中に文法や語彙の誤りを指摘しすぎてしまうと、生徒は萎縮して話せなくなってしまう可能性があります。やり取りの活動をしているときは、コミュニケーションに集中させてあげましょう。

ただし、忘れてはいけないのは、間違える機会を与えるだけでなく、正しいインプットも与えてあげるということです。そうすることで、生徒は自分が話している内容と正しい表現を比べて、自分の誤りに気付くことができます。この「気付き」を促すことが、正しく話せるようになるための足掛かりになります。

例えば、ロールプレイなどの活動に取り組ませるときは、モデルとなる会話を導入して音読練習などをした後、1回目のロールプレイを行います。その後、2回目を行う前に、再びモデルの会話を聞かせたり音読練習をさせたりします。このように、正しいインプットを与える時間と、やり取りの活動を行う時間を交互に組み合わせることが大切です。

話させた後に書かせることで確認を

英語でやり取りをしているとき、多くの生徒はおそらく話すことに精一杯で言語形式に注意を向ける余裕がありません。また、ペアで話しているときは友だちが話した内容を何となく真似して言うことで、「話せた」という気になってしまい、実は自力では英文を作れなかったりする場合もあります。生徒自身に自分がどのくらい話せているのかを自覚させるために、やり取りをさせた後に、その内容を個人で書かせてみるはどうでしょう。ペアで話したセリフを思い出して書き起こさせてもよいですし、自分が言ったこと、あるいは、ペアの相手が言ったことだけを書かせるのでもかまいません。

このとき、言いたかったけれど言えなかったことを辞書で調べさせてもよいでしょう。英語でやり取りをしている最中は余裕がなかった生徒も、書いているときは、英語の語順や適切な語彙使用などに注意を向けることができますし、ペアで話しているときは言えたと感じていたけれど、一人で表現しようと思ったら実はわかっていなかったということに気付くかもしれません。生徒が書いた英文は、回収して目を通すこともできるので、生徒個人がどのくらいわかっているのかを確認できますし、添削して返却することもできます。



Matthew Miller (Tokyo University of Foreign Studies)

Storytelling in the foreign language classroom is not a new idea. In fact, it is one of the activities I remember best from when I was learning French as an elementary school student. That being said, it is always good to remind ourselves of the power stories have to reinforce our students' education. I probably do not need to mention that stories attract students' attention through imagination and narrative and, in this way, make learning fun and seemingly effortless. Here are a few other benefits:

1) Contextual, emotional, and deep learning

When students discover language in context like a story, it helps them learn by linking vocabulary and grammar to memories of emotions, characters, setting, and plot. The language thus becomes personal and meaningful. All this naturally leads to better understanding and retention for longer periods of time.

2) Cultural appreciation

Students come to know a language's culture through its stories. Becoming acquainted with the culture's traditions, values, and even humor leads to important insights that bring the culture and language closer to the students so they can

develop a more profound understanding, appreciation, and curiosity. This, in turn, leads to an increase in motivation to know more.

3) Natural language acquisition

Storytelling is similar to the way that children learn their native language. A substantial amount of input is one of the key steps to begin language learning. It allows the students to internalize language patterns as well as make their pronunciation closer to that of native speakers.

4) Stories enhance other skills

Storytelling is never a passive activity. Students ought to be given the opportunity to react to the readings and express themselves through speaking and writing exercises. In addition, relating to characters in stories helps our students build strong empathy skills.

Teachers can find many free resources for storytelling on the National Education Association's "Read Across America" website. For high-quality children's books, search for ones that have won the John Newbery Medal, the Jane Addams Children's Book Award, the Caldecott Medal, or the Guardian Children's Fiction Prize.



リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (中京大学)

「固有名」にtheがつくのはどういう時か



『固有名詞』(proper nouns)って何?と生徒に投げかけたらどういふ答えが返ってくるだろうか。人や動物の名前(Martin Luther King, Jr., Rosa Parks, Luna)、地名(Montgomery, Alabama)、施設や学校の名前(Morehouse College, Boston University)といったところだろうか。

厳密に言えば固有名(称)(proper names)と固有名詞は異なる。Boston Universityは固有名ではあっても固有名詞ではなく、(universityは一般名詞なので)ここで固有名詞と言えるのはBostonだけである。ともあれこうした例を見ると、英語の固有名は大文字で始まり、日本語と同様に「唯一の人・物・事」を指して、文法的には第13回(TEN 52)のzero冠詞と同じ振る舞いだと思うかもしれない。

しかし、キング牧師が“I Have a Dream”のスピーチを行ったリンカーン記念館は世界に一つしかない施設だが、“the Lincoln Memorial”と冠詞がついている。考えてみれば、アメリカ合衆国も“the United States of America”である。イギリス(the U.K.)、オランダ(the Netherlands)、フィリピン(the Philippines)も同じで、何度もtheをつけたら直されたり、theがいるのかいないのかを迷って調べたりした学習者は私だけではないだろう。これは一体どういうことなのか。

実は、固有名には2つのタイプがある(Huddleston & Pullum (Eds.), 2002, p.517)。固有名は当然ながら指し示すものの範囲がはっきり定まって(definite)おり、冒頭に挙げた例のような「強い固有名」(アーティスト名で言えばABBAタイプ)の場合、それによって定性の表示は不要になる。一方、「弱い固有名」(アーティスト名で言えばthe Beatlesタイプ)の場合、指し示すものの境界が必ずしも明らかではないため、theを置くことでその固有性を明示する。

これによって、例えば“Ohio”と言えばアメリカの州の名前を指す一方で、“the Ohio”がオハイオ川を指すということが起きる。オハイオ州は明確な境界を持った行政区域だが、たとえ一つしかない川だとしても、約1,600kmに及ぶオハイオ川の端から端までが明確に思い浮かぶ人はいない。しかも川は流れた。“the Ohio River”と言っても差し支えないが、“the Thames”がテムズ川を指すように、“the Ohio”と言えばオハイオ州を東西にまたぐ「あの」川を指すというわけである(Radden, G., & Dirven R. (2007). *Cognitive English Grammar*. John Benjamins, pp.100–101)。エイブラハム・リンカーンについてのmemorialは様々にあり得るので、英語では、「あの」リンカーン記念館と言う必要があるのだ。

さらに“the United States”のような複数形の固有名の場合は常に弱い固有名となる。アメリカ合衆国の場合は、固有の州で構成され、(アラスカ州やハワイ州の存在で明らかのように)地理的に不連続で、領土が変わる可能性もあるからだ。同じことがフィリピンのような島嶼国や諸島名、山脈の名前(the Alps, the Himalayas)にも当てはまる。いわばtheは、複数の要素から成るものの固有性を束ねるクリップなのだ。

この連載の固有性は洋楽にあると言ってももはや過言ではないので、ここでEminemの“Lose Yourself”を聴いて、そこに含まれる固有名に注目してみよう。この曲は、彼の半自伝的な映画8 Mileの主題歌であり、主人公のステージネームRabbit、親友役を演じる俳優Mekhi Phifer、地名Salem's Lotが強い固有名として登場する。もう一つの強い固有名はGodだ。他方、弱い固有名として“the Globetrotter”と“the Pied Piper”が出てくる。前者は、高級スーツケース・メーカーの名前だけでなく一般名詞としても「世界を旅する人」という意味を持つが、後者は「あの」(ハーメルンの)笛吹き男というわけである。“Lose Yourself”は、これまでの連載で取り上げた可算性や冠詞、人称代名詞などの復習にももってこいの曲である。ヒップホップは文法の教材にもなるのだ。

令和7年度版

NEW CROWN

デジタル教材のご案内

指導者用 授業準備の負担軽減とスムーズな授業展開をサポート!



紙面提示、本文拡大表示、資料動画、ピクチャー／フラッシュカードなど、好評の機能をリニューアルしました。紙面から豊富なコンテンツを簡単に呼び出すことができるので、スムーズな授業展開が可能です。

NEW 授業プラン

授業展開にあわせて、コンテンツを組み替えることができます。

NEW NEW CROWN CORPUS

教科書本文をデータベース化しました。特定の単語が使われている文を一覧で確認できます。

おもな収録機能

- 紙面提示 ●本文拡大(再生速度調整・カラオケ表示、行間設定、発音・和訳表示切替、マスク等)
- ペン・スタンプ ●スクリーンショット ●授業ツール(タイマー・ルーレット等)ほか

学習者用 レベル別学習コンテンツと学習記録で自学をサポート!

教科書・教材一体型

学習者用デジタル教科書のコンテンツ・機能に加え、教材での追加機能をシームレスに利用可能!

ワーク・ドリルコンテンツ

教科書の本文・単語に沿った4技能の学習を積み重ねられる、ワーク・ドリルコンテンツを豊富に収録!

家庭学習モード

3段階のレベル別学習コンテンツの選択や、学習履歴の閲覧・記録などを行える「家庭学習モード」を搭載。

辞書付なら、最新の英和・和英辞書が丸ごと使える!

指導者用デジタル教科書(教材)

品名	ライセンス期間	ライセンス形式	価格
指導者用デジタル教科書(教材) [フル期間ライセンス](各学年)	教科書刊行期間	学校内ライセンス	99,000円(税込)
指導者用デジタル教科書(教材) [年間ライセンス](各学年)	年間	学校内ライセンス	33,000円(税込)

*株式会社Lentranceの提供するLentrance Readerでのご利用となります。対応環境は、Lentrance Readerに準じます。(指導者用、学習者用共通)

*年間ライセンスの期間はご注文月の翌年同月末までです。

学習者用デジタル教材[教科書・教材一体型]

品名	ライセンス期間	ライセンス形式	価格
学習者用デジタル教材 (各学年)	教科書刊行期間	生徒あたり 1ライセンスが必要	550円(税込)
学習者用デジタル教材 辞書付 (各学年)	教科書刊行期間※	生徒あたり 1ライセンスが必要	1,100円(税込)

*学校採用専売の商品です。一般向けに販売する商品とは異なります。

※辞書コンテンツのみ、購入年度内に限り有効。継続してご利用いただくためには次学年の購入が必要です。別途、デジタル教科書の販売もございます。価格等の詳細はお問い合わせください。

本紙掲載の会社名、製品名、商品名などの名称は、各社の登録商標または商標です。

三省堂 教科書・教材サイト

<https://tb.sanseido.co.jp/>

▶▶▶ 「ICT実践事例紹介」・「授業レポートプラス」公開中!

三省堂

〒102-8371 東京都千代田区麴町5-7-2

※この冊子は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って配布しております。